

# 高等学校英語教科書に見られる オーラル活動とタスクの分析

荒金 房子<sup>[1]</sup> 植草学園大学保健医療学部

実践的コミュニケーション能力の育成が重視されるようになり、コミュニケーション能力の育成に有効とされる「タスク」や「タスクを用いた教授法：Task-Based Language Teaching (TBLT)」が注目されるようになった。しかし、従来の文法シラバス等と比較してTBLTが効果を上げているという実証的な証拠は、十分には示されていない。教室でのインターアクションやインプットの機会の少ない日本において、事前に文法指導をせずに「意味」に重点を置いて行われるタスクの実施は難しく、教科書においてもタスクが少ないことは予想できる。

本研究では、日本でのタスク使用の可能性を探るため、新学習指導要領における高校英語教科書と旧学習指導要領のオーラル・コミュニケーション1（以下、OC 1）の教科書において、実践的コミュニケーション能力の育成のためにどのような活動が含まれているのかについて、高島他（2000, 2005）をもとにして作成した4つの活動、1）「コミュニケーション活動（CA）」2）「タスクを志向した活動（TOA）」3）「タスク活動（TA）」4）「タスク（task）」を分析基準として分析を行った。その結果、日本の高校教科書では、タスク活動やタスクは少ないことがわかった。これらの結果を踏まえて、日本の英語教科書では、より「意味」に重点を置いた活動の増加とTBLTを改良した活動の導入の必要性が示唆された。

キーワード：活動，タスク，コミュニケーション，TBLT，TSLT

## 1. はじめに

近年、コミュニケーション能力の育成に有効とされる「タスク」や「タスクを用いた教授法：TBLT」が注目されている。

しかし、TBLTが効果を上げているという実証的な証拠は、十分には示されていない（杉浦, 2012）。また、授業での重要なインプット源である英語教科書でのタスクの先行研究でも、意味交渉を必要とする「タスク」が少ないことが示されている。

教室でのインターアクションやインプットの機会が少なく主にPPP（Presentation-Practice-Production：文法などを教えた後、練習、発話によって言語を習得させる）での言語教育が行われてきた日本において、事前に文法指導をせずに「意味

（meaning）」に重点を置いて行われるタスクの実施は難しく、教科書においてもタスクが少ないことは予想できる。

では、EFL（English as a foreign language）の環境にある日本では、タスクは有効ではないのだろうか？

本研究では、日本でのタスク使用の可能性を探るため、2009年に告示され、2013年度から実施されている新学習指導要領における高校英語教科書と旧学習指導要領のオーラル・コミュニケーション1（以下、OC 1）の教科書において、実践的コミュニケーション能力の育成のためにどのような活動が含まれているのかについて、高島他（2000, 2005）をもとにして作成した「タスク」「タスク活動」「タスクを志向した活動」「コミュニケーション活動」の

[1] 著者連絡先：荒金 房子

4つの活動を分析基準として用いて研究を行う。

## 2 先行研究

### 2.1 タスク

日本では、「タスク」という言葉が、練習活動や役割演習を指して使用されている場合もある。しかし、第2言語習得理論や応用言語学の立場からの「タスク」とは、「学習者が課題の達成を目標として意味に焦点を置いて言語を使用する活動」であり、本研究でもこの立場をとる。

タスクが第2言語習得に有効であるとされる背景には、第2言語（外国語）習得には、インプット、話者間のインタラクション、アウトプットが重要であるという考えがあり、Long (1985) のインタラクション仮説 (Interaction Hypothesis) と Swain (1985) のアウトプット仮説 (Output Hypothesis) が背景となっている。

- (1) Interaction Hypothesis (Long, 1985) ; 聞き返したり確認したりする意味交渉 (negotiation of meaning) を通して言語活動は促進される
- (2) Output Hypothesis (Swain, 1985) ; アウトプット (学習者が目標言語を話したり書いたりして使用すること) が言語習得において必須の条件であるとする仮説

タスクが第2言語習得に有効であると考えられる主な理由として以下があげられる。(Swain, 1998; 高島, 2005)

- 1) 意味のやり取り (negotiation of meaning) の中で理解可能なインプットや適切なフィードバックを得られる
- 2) 実際に言語知識を運用するアウトプットの機会を得られる
- 3) 他者と協力して課題を達成する中で言語発達を促す

Willis (1996) は、「タスクとは、学習者が特定の目標を達成するために意味の理解と伝達を行う活動であり、タスクの目標は、言語使用のために実際の目標を作り、言語学習のための自然な流れを与えることである」と述べている。

研究者によってタスクの定義は異なるが、Ellis (2003) ; Nunan (1989, 2004) ; Skehan (1996, 1998) ;

Willis, 2007; Bygate, Skehan, and Swain (2001)) らの定義をまとめると以下ようになる。

- 1) 言語形式というよりも意味の伝達に焦点
- 2) 与えられた課題を達成するために、学んできた言語材料を駆使し、自分の意思を伝達
- 3) 現実の世界で使われているような言語使用を引き出せるようつくられるべき
- 4) 課題の達成が最終目標
- 5) 結果 (与えられた課題が達成されたか) によって評価

### 2.2 日本におけるコミュニケーション活動とタスク

しかし、日本のようなEFLの環境で、事前に (タスクで扱う内容についての) 文法指導をしないで行われるタスクやタスクを用いた教授法 (TBLT) の有効性はまだ十分に示されていない。さらに、日本のような構造シラバス (structural syllabus) を基準とするカリキュラムでは、「特定の文法構造」にも焦点をあてるべきであるとされる。

藤井 (2005) は、日本には日本の学習環境に応じた日本型のタスク活動があり、そのなかでも小学校でのタスク活動、中学校でのタスク活動と様々に形を変えていくものでなくてはならないと述べている。また、Ellis (2003) もタスクは基本的な定義と同時に、タスクが使われる目的に応じて修正される必要があるとしている。

Ellis (2003) は、ESL (English as a Second Language) の環境下では、unfocused task (活動時に使用する文法構造はあらかじめ特定されておらず学習者は既習の文法、語彙を駆使して活動が遂行される。教師が意図する文法構造を学習者が常に使用するとは限らず、活動後の教師からのフィードバックが必要) が活用されており、EFLの環境下では、focused task (messageを重視すると同時に特定の文法構造を使用することを狙って作成) が有効であるとする。しかし、focusedタスクも、目標となる言語的特徴は 'hidden' され、明示的にはその特徴を指示されない。

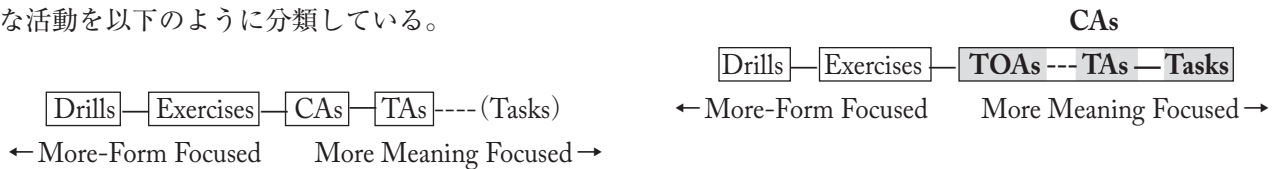
タスクを用いたアプローチには、以下の2つがある。

- (1) Task-Based Language Teaching (TBLT) ; タスク

をシラバスの軸とし、タスクを行うことを通してその過程で生じる言語使用を取り上げて言語教育を行う。各授業で完結するタスクを使用したり、プロジェクトを利用する。

(2) Task-Supported Language Teaching (TSLT) ; 構造シラバスや機能シラバスのような文法構造を指導するシラバスの中でタスクを補助的に使用する。その方法には、文法構造を指導するシラバスとTBLTを併用するか、あるいは、PPPの最後のProductionの段階でタスクを取り入れる(杉浦, 2012)やり方がある。

日本でTSLTのモデルを考案しているのが高島(2005)である。高島(2000)は、教室における主な活動を以下のように分類している。



この中で、ドリル (Drills), エクササイズ (Exercises), コミュニケーション活動 (Communication Activities: CAs) はそれぞれ次のように定義される。ドリルは、語または一文レベルのパターンプラクティスであり、エクササイズは英語のルールを定着させるための文レベルの練習、そしてコミュニケーション活動は、インフォメーション・ギャップのあるペアもしくはグループの対話形式の活動である。

また、タスク活動 (Task Activities: TAs) は、構造シラバスを基本として構成されている検定教科書を用いた指導を前提として、学習者が使用する言語形式を主体的に選択し、相手との自然なコミュニケーションを通して、与えられた課題を遂行する、原則として対話形式の活動や発表を指す。タスクと異なるのは、活動中段階を追って指示が与えられる点で、会話例などはないが、会話の内容と手順は段階を追って指示され、可能な限り、目標文法項目が、他の既習文法項目と比較され、選択されながら使用されていくようにあらかじめ場面設定がされている。また、教師が意図的に2つ以上の文法構造の比較をさせたり、意味のやりとり (negotiation of meaning) を生じさせたりという、操作が加わることもある。

タスク活動の特徴は以下の通りである。

- 1) 意味・伝達内容が中心である (meaning-focused)
- 2) 言語を用いて与えられた活動目標を達成することが第1義であること (completion)
- 3) 意味の交渉がある (negotiation of meaning)
- 4) 2つ以上の構造の比較があること (comparison of structures)
- 5) 話し手と聞き手に情報の差があること (information-gap)
- 6) 得られる情報や活動が興味深いものである (of interest)

さらに、高島(2005)は、Task-Supported Language Teaching (TSLT) の1つの試みとして以下のモデルを提示している。

ここでは、タスク活動の前に「タスクを志向した活動 (Task-Oriented Activity: TOA)」が設定されている。「タスクを志向した活動 (Task-Oriented Activity: TOA)」(高島, 2005) は、タスク活動 (TA) の前段階の言語活動としてモデル・ダイアログや語彙を与えながらも、タスクやTAと同様に課題解決を目標に持つ。すなわち、特定の場面や状況の中で与えられたダイアログや語彙・文法構造などを用いて課題解決を行う原則として対話形式の活動や発表を指す。TOAの特徴は以下の通りである。

- 1) 言語を用いて課題解決をする目標がある
- 2) 2人以上による情報の授受・交換を行う
- 3) 話し手と聞き手に情報の差がある
- 4) 指定されたモデル・ダイアログなどに従って活動する

TOAとTAは、モデル・ダイアログの有無という点で異なる。

タスクは、課題解決に向けて学習者が比較的自由に持っている力を最大限発揮しながら遂行する活動で、表現や語彙等の条件はないのが普通である。

タスクにはTAのように段階付けがなされていないため学習者自身が会話を展開していく必要性があり、その意味でタスクは現実世界により近い状況を作りだす。高島(2005)は、タスクが最終目標であるが、TOA, TAも重要であるとしている。



また、このモデルでの「コミュニケーション活動」は高島（2000）のものとは異なり、(1)タスク (Task)、(2)タスク活動 (Task Activity: TA)、(3)タスクを志向した活動 (Task-Oriented Activity: TOA) の3つをコミュニケーション活動としている。

表1、2は、CA, TOA, TA, Taskを比較したものである。

表1 CA, TOA, TA, Taskの違い

	インフォメーション・ギャップのあるペアやグループの対話形式の活動	モデル・ダイアログや語彙の有無	目標としての課題解決
CAs (高島, 2000のみ)	○	○	×
TOAs	○	○	○
TAs	○	×	○
Tasks	○	×	○

表2 CA, TOA, TA, Taskの違い

CA	2人以上による情報の授受・交換を行う。対話者間にインフォメーションギャップがある。指定された構造を用いたり、モデルダイアログに従い行動する。
TOA	言語形式の定着を重視するために、モデル・ダイアログや語彙を与えながらも、TaskやTAと同様に、課題解決を目標に持つ。
TA	タスクと同様に課題解決が目的であるが、学習者がその目的に到達しやすいように、活動に会話の進行を段階的に示す。
Task	達成すべき目的のみが示され、課題解決に至るまでの過程、つまり、会話の展開方法などは学習者が考える。

### 2.3 教科書分析と問題点

英語教科書でのタスクの研究については、Izumi (1996) が、Nunan (1989), Pica et al., (1993) の分析基準をもとにして、旧学習指導要領下のオーラル・コミュニケーションA (OC-A) の教科書とESLコースブックのタスクの分析を行った。その結

果、OC-Aの教科書では、パターンプラクティスなどのオーラルドリルが豊富に用いられ、ESLの教科書には豊富に配置されているインタビュー、意思決定、意見交換、問題解決など多くの意味交渉を要するタスクが少ないことが示された。

また、江草&横山（2007）はOC 1の教科書のタスクの特徴の分析を行い、タスクの中に含まれる、情報処理作業量、情報の種類別の特徴が、流暢さ、正確さ、複雑さ、意味交渉などにどのような効果をもたらすかという Skehan (1998) の分析方法を用いて、OC 1、OC 2 (OC 1と同じタイトル)、市販のESLのコースブック (高校/大学レベル) を分析した。その結果、高校OC 1の教科書は、インターラク션을必要とするものが少ないため意味交渉は期待できないことが示された。

## 3 研究

### 3.1 目的

本研究では、2009年に改訂され、2013年から施行されている新学習指導要領における高校英語教科書「英語表現Ⅰ」、「英語会話」、「コミュニケーション英語Ⅰ」と旧学習指導要領におけるオーラル・コミュニケーション1 (OC 1) において、コミュニケーション育成のためにどのような活動が含まれているかを、以下の点に焦点を置いて量的質的に分析する。

- 1) 4つの各活動 (CA, TOA, TA, Task) について
- 2) 新旧学習指導要領の各科目間 (OC 1, 英語表現, 英会話, コミュニケーション, 英語Ⅰ) での違い
- 3) タスクの種類

### 3.2 方法

#### 3.2.1 マテリアル

2009年に告示された高等学校新学習指導要領の「外国語科」では、「コミュニケーション英語基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」「英語表現Ⅰ、Ⅱ」「英語会話」という新しい科目が編成されている。本研究では、2013年度から出版され使用されている「英語表現Ⅰ」、「英語会話」、「コミュニケーション英語Ⅰ」と旧学習指導要領におけるオー

ラル・コミュニケーション1 (OC 1) を分析対象とする。

オーラル・コミュニケーション1 (OC 1) で、採択率の高い上位8社の中で、新課程の教科書で、「英会話」が出ている4社 (A社, B社, C社, D社) (占有率 合計42.4%) の「OC 1」, 「英語表現 I」, 「英語会話」「コミュニケーション英語1」の教科書27冊 (表3参照) を分析する。

表3 4社の「オーラルコミュニケーション1」  
「英語表現」「英会話」「コミュニケーション1」

科目/ 出版社	OC 1 = OC	英会話 = C	英語表現 = E	コミュニケーション英語 I = CM
A	OCA	CA	EA	CMA1
				CMA 2
				CMA 3
B	OCB	CB	EB1	CMB1
			EB2	CMB2
C	OCC	CC	EC1	CMC1
			EC2	CMC 2
				CMC3
D	OCD1	CD	ED1	CMD1
	OCD2		ED2	CMD2
	OCD3			

### 3. 2. 2 手順

高島 (2000) と高島 (2005) においては、「コミュニケーション活動」の扱いが異なる。本研究では、「コミュニケーション活動 (CA)」の定義を、高島 (2005) による定義ではなく、高島 (2000) の定義、すなわち、「インフォメーション・ギャップのあるペアやグループの対話形式の活動」とし、以下のように、高島 (2005) の「タスクを志向した活動 (TOA)」「タスク活動 (TA)」「タスク (task)」に、「コミュニケーション活動 (CA)」を加えて、これら4つを分析基準とする (Appendix A, B, C, D を参照)。

本研究

Drills—Exercises—**CA**s—---TOAs---TAs—Tasks  
← More-Form Focused      More Meaning Focused →

表4 Pica, Kanagy and Falodun (1993) の5つのタスク分類

タスクのタイプ	特徴
1 Jigsaw (ジグソー)	参加者がそれぞれ情報を持ち、課題を達成するためにはお互いの情報を出し合わなければならないタスクで、結論は一つである。
2 Information gap (インフォメーション・ギャップ)	重要な情報をもっている参加者から情報を引き出して、課題を達成するタスクで、結論は一つである。情報要求・提供のやり取りは必要だが、情報の流れが双方向でない (1名だけが兵法を握っている) という点でジグソーと異なる。1名が1セットの情報を持ち、もう一人が補足情報を持つ。
3 Problem-solving (問題解決)	現実や架空の問題の解決を探るタスクで、到達すべき結論は一つである。
4 Decision-making (意思決定)	全体の意思を決定するタスクで、結論は一つ以上である。たくさんの結果の可能性のある問題を与えられ、意味交渉やディスカッションを通してひとつを選ばねばならない。
5 Opinion exchange (意見交換)	あるトピックについて議論したり、意見の交換をしたりするタスクで、特定目標はなく、必ずしも agreement に達する必要はない。

また、タスクの分類に関しては、表4のPica, Kanagy and Falodun (1993) の5つのタスクの分析手法を使用する。

分析は、本研究者が1人で2回行った。2回の分析においては、相関係数 $R=0.99$ で、1回目と2回目の分析には相関が見られた。

## 4 結果と考察

### 4. 1 結果

分析には、SPSS Statistics 19を用い、2元配置の分散分析を行った。表5は、各活動の統計量の結果を表している。

表5 各活動の統計量

	度数	範囲	最小値	最大値	平均値
	統計量	統計量	統計量	統計量	統計量
CA	27	34	0	34	11.9
TOA	27	13	0	13	2.56
TA	27	1	0	1	.22
T	27	5	0	5	.48

表6は、各科目間に見られたタスクの種類の数である。

表6 科目間でのタスクの種類の数

タスク/科目	意見交換	意思決定	問題解決	インフォメーションギャップ	ジグソータスク	計
OC1	2	2	1	1	0	6
英会話	0	0	0	0	0	0
英語表現	4	0	0	0	0	4
英語コミュニケーション1	2	1	0	0	0	3
計	8	3	1	1	0	13

## 4.2 考察

### 1 各活動について

4つの活動の中では、コミュニケーション活動の平均値が11.9で最高、タスク活動が一番少なかった。

### 2 新旧学習指導要領の各科目間（OC1, 英語表現, 英会話, コミュニケーション英語1）での違い

旧学習指導要領のOC1では、TOA, TA, タスクはいずれも4科目の中で一番多く、より「意味」を重視した活動が含まれているといえる。

新学習指導要領の「英会話」では、CAが最も多くみられたが、TOAも多いとはいえず、TAやタスクはゼロであり、より「構造」重視の内容となっていると思われた。むしろ、「英語表現」「コミュニケーション英語1」の方がTAやタスクなどもわずかなではあるが含まれ、「英会話」よりは各活動がまんべんなく含まれていた。

### 3 タスクの種類

タスクは、OC1の教科書で6個、新学習指導要領の「英会話」では、ゼロ、「英語表現」で4、「英語コミュニケーション1」で3個見られた。

また、タスクの5つの種類の中では、「意見交換」が一番多く、8個、ついで「意思決定」が3個、ジグソータスクはゼロであった。

## 5 結論

本研究では、高校英語教科書においてコミュニケーション能力を育成するためにどのような活動が見られるかを調査した。新旧学習指導要領における4科目の教科書27冊を、4種の活動を分析基準として用いて調査した。その結果、以下のことがわかった。

1) 新旧の学習指導要領による高校英語教科書では「タスク活動」「タスク」は非常に少なく、創造性の少ない「コミュニケーション活動」が多くみられた。

2) 新旧の学習指導要領の科目を比較すると、むしろ、旧学習指導要領によるOC1の方で、「タスクを志向した活動」「タスク活動」「タスク」が新学習指導要領による科目よりも多く見られた。

3) 「タスク」の種類については、OC1では、5タイプのうち、4タイプの活動が見られたが、新学習指導要領の科目では、ほとんどは、「意見交換」であり、さまざまな種類のタスクを使用する必要があると思われる。

4) 「コミュニケーション活動」については、自由度の高いものから単なる数文程度の会話練習まで範囲が広く、それを区別する基準も必要であると思われる。

5) また、「タスクを志向する活動」や「タスク活動」においても、「タスク」の分析基準のように、どのような種類の活動であるかを分類する基準が必要

6) 日本のように授業数も限られているEFLの環境において、TBLTの実施はなかなか難しいが、TSLTの実施は可能であり、高島他(2000,2005)のように段階を踏んだ活動を利用していくのは効果的な手法であると思われる。

現行の教科書は、旧学習指導要領のOC1よりも「意味」を重視した活動がさらに減少していると思われる。コミュニケーション能力の育成のために、さまざまな活動を取り入れていく必要があると思われる。

## 6 参考文献

- Ellis, R. (2003). Task-based language learning and teaching. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Izumi, E. (1996). Gambits and Routines for Promoting Oral Communication: Textbook Analysis and Task Design. ARELE, 7, 145-158.
- Long, M., & Robinson, P. (1998). Focus on form: Theory, research, and practice. In C. Doughty & J. Williams (Eds.), Focus on form in classroom second language acquisition (pp. 15-41). Cambridge: Cambridge University Press.
- Nunan, D. (1989). *Designing Tasks for the Communicative Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pica, T., Kanagy, R., & Falodun, J. (1993). Choosing and using communication tasks for second language instruction and research. In G. Crookes & S. Gass (Eds.), *Tasks and Language Learning: Integrating Theory and Practice* (pp. 9-34). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Skehan, P. (1996). A Framework for the Implementation of Task-based Instruction. *Applied Linguistics*, 17 (1), 38-62.
- Skehan, P. (1998). *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford: Oxford University Press.
- Willis, J. (1996). A Framework for Task-based Learning. Harlow: Longman.
- 江草千春他. (2007). 「英語教科書におけるコミュニケーションタスクの傾向分析と第2言語習得研究からの考察」『Research bulletin of English teaching』4, 1-23.
- 杉浦理恵 (2012). 「英語のコミュニケーション能力を育成するためのタスクを用いたアプローチの課題と今後の指針」『実用英語教育学会紀要』2, 9-20.
- 高島英幸 編著. (2000). 実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』大修館書店.
- 高島英幸 編著. (2005). 『文法項目別英語のタスク活動とタスク』大修館書店.
- 藤井浩美 (2005). 「日本の英語授業におけるタスク活動の特徴と課題——小学校・中学校のタスク活動の分析を通して——」『鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編)』20, 163-170.
- 吉川実樹, 城山良子, 内山真一, 後藤光毅, 岩井玲子, 米津明彦, 広瀬八重子. (2009). 「TBLT 知県総合教育センター研究紀要」第98集. PDF 931KB, 92.
- 清田洋一他 (2013). All Aboard! Communication English I
- 下崎肝寛他 (2013). Power On Communication English 1. 東京: 東京書籍
- 下崎肝寛他 (2013). PROMINENCE Communication English I. 東京: 東京書籍
- 酒井志延他 (2013). Hello there! English Conversation. 東京: 東京書籍
- 中邑光男他 (2013). NEW FAVORITE English Expression I 東京: 東京書籍
- 石田雅近他 (2013). Hello there! Oral Communication 1. 東京: 東京書籍
- 金子朝子他 (2013). VISTA English Communication I. 東京: 三省堂.
- 下崎肝寛他 (2013). Crown English Communication 1. 東京: 三省堂.
- 森住衛他 (2012). MY WAY English Communication I. 東京: 三省堂.
- 森住衛他 (2012). MY WAY English Expression I. 東京: 三省堂.
- 霜崎 實他 (2013). CROWN English Expression I. 東京: 三省堂.
- 北出亮他 (2013). SELECT English Conversation. 東京: 三省堂
- 北出亮他 (2013). SELECT Oral Communication I. 東京: 三省堂
- 吉田研作他 (2012). Birdland Oral Communication 1. 東京: 文英堂.
- 市川泰男他 (2013). UNICORN English Communication I. 東京: 文英堂.
- 倉持三郎他 (2013). Grove English Communication I. 東京: 文英堂.
- 倉持三郎他 (2013). My Passport English Conversation. 東京: 文英堂.
- 市川泰男他 (2013). UNICORN English Communication I. 東京: 文英堂.
- 倉持三郎他 (2013). Grove English Communication I. 東京: 文英堂.
- 末永罔明他 (2013). OPEN DOOR to Oral Communication Book I
- 末永罔明他 (2013). OPEN DOOR to Oral Communication Book II
- 卯城祐司他 (2013). ELEMENT English Communication I. 東京: 啓林館.
- 竹内理他 (2013). LANDMARK English Communication I. 東京: 啓林館.
- 八島智子他 (2012). Sailing English Conversation. 東京: 啓林館.
- 野村恵造他 (2013). VISION QUEST English Expression I Advanced. 東京: 啓林館.
- 野村恵造他 (2013). VISION QUEST English Expression I Standard. 東京: 啓林館.
- 八島智子他 (2012). Sailing Oral Communication I. 東京: 啓林館.



## Appendix A

### 「コミュニケーション活動 (CA)」の例

1. 友達と会話して友達の名前や出身地，職業を聞き，下の表を埋めましょう。

	あなた	友達
名前		
出身地		
職業		

#### 会話例

あなた Are you from ~?  
 友達 I'm from Japan.

## Appendix B

### 「タスクを志向した活動 (TOA)」の例

#### パインアップル VS ハニー

あなたは，コンピュータ販売店「パインアップル」でコンピュータを買おうと思っています。友達  
 のBさんはライバル店の「ハニー」で買うことに  
 しているようです。自分が買おうと思っているコン  
 ピュータの優れているところを，下の会話に従って  
 相手に言いましょう。お互いに情報を交換してどち  
 らのコンピュータが良いか決めましょう。

#### 会話例

A : The Pineapple is - er /more ~ .  
 B : The Honey is - er /more ~ .

空欄は下のパターンを使って聞いてみよう。

The Pineapple is ( ) yen.

How about the Honey?

軽い	light
カラフル	colorful
薄い	thin . . . .

		パインアップル	ハニー
番号	実物の 1 /10の大きさ	パインアップルの画像	ハニーの画像
1	軽い	2 kg	
2	カラフル	5 色	
3	小さい	上の図を見て比べよう	
4	薄い	19mm	
5	役立つ		
6	安い	18万円	

## Appendix C

### 「タスク活動 (TA)」の例

#### PONY or SHARK

次の場面でパートナーと会話してみよう  
 あなたは日本橋の電気店で働くAさんです。店にイ  
 ギリス人のBさんが来ました。

1. Bさんに笑顔で話しかけましょう
2. あなたの店で売っているPONYのMDプレーヤーのセールスポイントを実寸大のカラー写真を使用して伝えましょう。

#### PONYのセールスポイント

○小さい	○軽い	○強い
○美しい	○カラフル	○安い

3. Bさんの話を聞いて2万円で売っても良いことを伝えましょう。
4. Bさんはどちらの商品を選びましたか○をしましょう。

#### Sheet B

BさんのシートでAと同じように客への指示が書かれている

## Appendix D

### 「タスク」の例

あなたは，コンピュータ販売店「パインアップル」でコンピュータを買おうと思っています。友  
 達のBさんはライバル店の「ハニー」で買うこと  
 にしているようです。自分が買おうと思っているコン  
 ピュータの優れているところを相手に言いま  
 しょう。お互いに情報を交換してどちらのコン  
 ピュータが良いか決めましょう。



## Analyzing Oral Activities and Tasks in Japanese Senior High School Textbooks

Fusako ARAKANE<sup>[1]</sup>

Faculty of Health Sciences, Uekusa Gakuen University

This study analyzes the activities and tasks in twenty-seven Japanese senior high school textbooks, attempting to clarify which activities and task characteristics are most commonly present. As part of the present Course of Study, the Ministry of Education introduced a new kind of course, which includes Communication English I, English Expression I, and English Conversation. The actual instruction of this course began in the classroom in 2013. In line with the recent communicative trend, there have been growing expectation of Task-Based Language Teaching (TBLT) in the teaching of oral English. There has been a great deal of discussion on effective techniques for using TBLT. At the same time, very little research has been carried out to draw on regarding how effective TBLT in Japan actually is. Instead a new way from TBLT has appeared: Task-Supported Language Teaching (TSLT). Considering this background, the activities in senior high school textbooks were analyzed from the following four viewpoints: 1) Communication Activity (CA) 2) Task-Oriented Activity (TOA) 3) Task Activity (TA) 4) Task. From the results of the analysis, it was found that there were few task activities and tasks in Japanese senior high school textbooks. These findings suggest that it is necessary to not only proactively increase meaning focused activities in English textbooks, but also modify TBLT in English classes so that they match the descriptive contents of the Course of Study.

**Keywords:** activities, tasks, communication, TBLT, TSLT

---

[1] Fusako ARAKANE